

沖縄の海は碧い

沖繩の海は碧い

著者との
協定により
検印廃止

1956年7月31日 第1版刊行

著 者 島 村 進
しま むら すむ

刊行者 竹内 富子

株式 三 笠 書 房
會社
定 価 250円
地方価 260円
東京都千代田区神田神保町二丁目
電話九段區 6504 振替東京 22096
7483

© Susumu Shimamura, 1956. Printed in Japan

堀内印刷 ・ 徳住製本

沖縄の海は碧い、

島 村 進



三笠書房

川越分館

沖繩の海は碧い

第一部

一九四〇年 月 日

透明な夜の陽炎が燃えている。

牙えた空、溢れる大気、蒼白い湿い、快い渴き……夜——南国の夜の匂いだ。澄みきつた、未知の時がめざめる。冷たい皮膜につつまれた熱い細胞の核がはじけるように、やがてそれは、きりもなく分裂し、増殖しはじめる。時が熱れ、光が充ち……ふしぎだ。静かな動悸が沈んだまま高潮を招き、異様な戦慄が背筋をよぎつて走る。なぜ……いつたい君、なぜこの夜の光は、僕の心をこんなにはげしくゆすぶるのだろう。

昨夜のように、月は黄金森の木立の蔭からのぼつた。ひそやかに……だれも知らない。こうして夜毎、風の流れすら気づかぬまに憩いの秘密が守られ、光と静けさのうちに時は安らかに保たれる。

君にはどう想像できるだろう。あの白光に濡れた赤屋根の街の粧いを、あの椰子や芭蕉の葉に風が織りなす光と影の戯れを、あのきめの荒い肌を潮の香にさらしている石垣の重厚なたたずまいを……ああ、なぜこの空は、こんなにも優しく、あたたかい光を惜しげもなく撒きちらすのだろう。

僕はいま灯を消して、心ゆくばかりこんな月の光に浸りながら、広縁に据えた小さな文机に向つてゐる。今こそそうだ、とさつきから何遍も空しく心にくりかえし呟きながら。

いかにも、ここには切り離された背景がある。回想にふさわしいあつらえ向きの孤独がある。しかしあの視界を阻む忌まわしい幻影が、あの巨大な黒い影が僕をつつみ、行手をさえぎり、いまなお僕につきまとつて離れないのだ。昨夜のように、と僕はたつたいま月の出を形容した。できれば僕は、明日のようにか、あさつてのようにか、言いたかつたのに。色褪せた過去よ。君、過去は過去に

見送らせよう。悔恨や呵責をやわらげるために、人は何故のべつ冗漫なくるしみを耐え忍ばねばならないかが分らない。滞るものがごとく覆され、新しい変化がむやみに求められる不眠不休の生活とは、いつたいなんだろう。それが君、ここではどうだ。あんなにまで嫌悪していた停滞が気にならないばかりか、こちら次第で心を委せていることもできるなんて。運命への期待や豊饒な現在が心によどみをもたらす貴重な瞬間のお蔭で、こんな秘かな慰めや励ましのことばに促されながら、つつがなく一日の終りの幕を閉じることができるなんて！ ああ、君、僕は仕合わせだ。僕はしみじみ生き甲斐をかんじる。ほんとに君、はるばるやつてきた甲斐があつたというものだ。

航海は至極平安、君が心配するほどのものは何ひとつ起らなかった。僕はいま、とりとめもなく思い浮べる。冷たい風に外套の襟を立てて、君と肩を並べて歩きまわつた懐しい神戸の街並を……僕の初の船旅を氣遣つて、恰度遠足の前夜幼い子供に母親がするように、万一に備える品をあれこれ買い集めてくれた君の心尽しの数々を……だが、正直のところ、僕はあの時しんから君に腹を立てていたくらいだよ。たつた三日ばかりの航程を、いつまた会えるか分らないとはいえ、こんな短い旅程を、あんな大仰な思いやりで、まるで流罪にでもあつたかのようなやりきれない氣分に追いこんでくれたのだからね。

波止場の人波にもまれながら、君はまるで節穴みたいな氣のぬけた眠つきで、じつと僕の方を見つめたまま棒のように立つていたね。僕はあの時ふと、君があのまま石になつてしまふかも知れないと思つたのを思いだす。船が次第に遠のいておたがいの姿が見えにくくなつた頃、君はやつと氣がついたように手をあげたね。そしてその手を振るでもなく降すでもなく、長い間空に支えて立ちつくしていたね。ふとしたことが惹き起す得がたい心の動きを、あのときほど烈しくかんじておののいたことはない。僕は君の一挙一動を思いだす度に泣けてくる。沢山のものを犠牲にしてまでこんな氣紛れな

旅路に追いたてたあの烈しい焦躁、君の好意を振りきつてまで船にのりこむようにしむけたあのふしぎな恐怖……僕はあのときやつと、大げさな言い方だが、やつと虎口を逃れたという安心で呆然としていたのだ。

船の中の話は、今いちいち書きつける興味も余裕もない。なにもかも無事に、順調に運んだ。君の懼れたような変化が全然なかつたわけではない。これまでになく発見や革命やが……だが君、それらとはとるに足らぬ変質というものだ。今日はただ、船脚が早くなるにつれてひとときまじに暖かくなつたこと、夜の甲板に激しい興奮をおぼえて海の涯からのぼる血の垂れそうな赤い月を眺め、波間にきらめく夜光虫の妖光に見とれて暮したことだけお報せしよう。

その日、伯父は従妹の節子を伴つて、波止場まで迎いに出てくれた。

「電報は昨日着いたばかりだ。何か起つたんだね。いや大丈夫だ。分つてる。おどろきやしない。さあ、いつてごらん。今度は誰の番だね」

伯父はのぞきこむようにして、挨拶代りにいきなりこう浴せかけたものだ。僕はすっかり面喰つてしどろもどろ、何と答えたか更に憶えがない。

「変りがないって？」と伯父は娘を振りかえつて安堵のいろを浮べながら言つた。「何にも変りがないんだね。あてが外れたよ、節子。いや、外れて結構だ。なにね、昨日も実はこれと話していたんだが、なにしろ東京から電報というと碌なことじゃないものだから。最初がお前のお母さんさ。つぎが四谷の兄貴。それに恩師にあたる人が二人と……藝医者や坊主なみに死亡通知ばかりだ。そんなときでもなけりや思ひだして貰えないと思うと腹も立つが、そんなときにはともかく思ひだして貰えるんだと思えば、おさまりもつくさ。だから今度もてつきりその手とばかり思いこんでね。まあ無事で

結構だ。ところで豊助（伯父はなめるような眼つきであらためて僕をじろじろと見つめた）お前も見違えるようになったじやないか。私が憶えているのは、まだこんな可愛らしい中学生姿のお前だよ。たしか四谷の法事で会つたきりだつたと思うが……そう、私の上京もあれつきりさ。ところでどうだい、この分別くさい顔つたら。これがあの青しよびれた中学生のなれのはてかね。肉づきはよくないが……いい体格だ」

港の雑沓をかき分けて歩きながら、伯父は喜びを包みきれずに高調子で快活に饒舌りつづけた。

「なにしろ節子がこの春女学校を卒えたんだからねえ。自分の年が思いやられる。それはそうと、この新学士様は今何をしていらつしやるね、なに、文部省？ ふん……好かんところだ。腰掛かね。まあいいさ。十年近くも会わないのに、こうして忘れないで訪ねてきてくれただけでも、身にあまる仕合わせというものだ」

この今井姓を名告る伯父が亡くなつた母の直ぐの兄にあたることは、君もすでに承知しているはずだつたね。僕が新しい母を迎えるようになってからも、伯父は上京の都度、めずらしい土産を抱えてかならず一度は氣さくに訪ねてくれた。国語学を専攻して早くこの地へ渡つた伯父は、三十年來島の方言や音韻変化などの研究にたずさわつていたのだが、数年前若い妻に先立たれてからは、長年の教師稼業をやめて、一人娘の成長を楽しみに、果庁の囑託の形で自由な学究生活を送つている。一口に言えば、そう豊かではないが気楽な身分だ。

あの頃、というのはすべてを熱心に書物から学んでいた頃、僕の記憶の焦点はどうしてもそこに落ちるのだが、幼心にも目の覚めるような朱塗の漆器や赤絵の壺などを前にして、あまり興のなさそうな父を相手に、血氣にまかせて丹念に説明を加えている色の黒い、目ばかりぎよろつかせた、そのくせ奇妙に親しみやすい「琉球伯父さん」の顔が折にふれてあざやかに蘇り、感じ易い少年の心をよく

遠い夢幻の異郷へ連れ去つてしまつたものだ。だが伯父の上京が間遠になるにつれて、その印象もいつとなく箔がおち、僕の幻想も次第に褪せていつたが……。

伯父も老けたなと思う。十年という歳月はこんなにも命のしるしを食へてしまうものだろうか。すっかり灰色にあらたまつたうすい髪の毛、同じ色の長いさがり加減の柔和な眉、老後にたつたひとつ残された学問的食欲をはのめかす平和ながらもきびしい眼射し、脂肪の落ちた寡欲な頬と日焼けして渋紙状になつた健康そうな皮膚……人並の名著欲に充ちていた往時のさかんな意欲と活力に代つて、そこにはただ、空洞になつた樹木を思わせる枯れた風貌が、恬淡と微笑んでいるばかりではないか。

「婆やが風呂を湧かして待つてゐる」と伯父は独りでよく喋つた。「ご馳走もたんまりあるぞ。船旅にはまず風呂、それから新鮮な滋養分と、こう来なけりやいけない。東京の連中は、のつけから判で押したように、深酒と長話を強いるが、あれにはうんざりさせられたね。よくない趣味だよ。帰つたら早速旅の垢を落して、ご馳走をたらふく食べて、豚のように眠るがいい。なに、話はいつでもできる。見物なら、あとで時間をかけて節子にゆつくり案内してもらうさ」

伯父は人力車を呼んだ。初対面の従妹はすつかり羞んで、それでもときどき愛くるしい眼でいたずらつぽく笑つたり、探つたり、調べたりしながら、黙つてついてくる。

沖繩——この言葉のもつ音感と幻想のゆたかさはどうだろう。琉球——なんてまた古めかしい美と造型と夢と憧れにみちた名前だろう。太陽と生命と明るい懷疑と見捨てられたエクゾティズム……君、僕は今後の生活を逐一君に報告しよう。その代り僕の語りたいと思うこと以外は、つまり語らねばならぬことや考えねばならぬことの大部分は、勝手ながらご容赦ねがいたい。いつか二人で見た燈籠流しの灯のように、印象を滑つて流れ去ろうとするはかない影や、過ぎ去つた風ののこしていく小さなひびきなんか、二人の間にだけ通じている秘密の波長にのせて、それとなく聞いていてくれれば

いいことなんだからね。忘れる努力だけが大切な周期にめぐりあうこともできぬような……僕は君、僕らがそうひどく一徹者でなかつたことを、駈引なしによるこんでいる。

今度の船旅は、一方ではせつばつまつた感情をやわらげもしたが、一面にはまた、異つた疑惑を惹き起しもした。僕はいわば、大きな楕円形の周囲をめぐつていたのだ。それも食後の軽い散策とは似てもつかないつよい歩調で、過去と絶縁したものの誇りやかな放縦と、明瞭な意志を双葉のうちに遮断されて幻影におびえるものの無感応とを二つの中心にして、めまぐるしく危機の意識が彫りつけるさまざまな矛盾の連続する汚点からなる周囲の上を……。

しかし君、どうやら僕は早くもふたたび多少感応しはじめたらしい。幼児のように……故意か？ それもある。作為か？ それもあろう。それでもいい。すくなくとも孤独感に……お手柄だ。たとえば、この手紙を書かずにはいられないこと。ちよつと筆を擱いてもいたたまれないこと。じつとしているのは身を刻まれるように辛い。これから裏の黄金森の丘にのぼつて、思う存分月光を吸つてあるきまわつてくるつもりだ。

今後のことは、いつか君に語つた全然新しい方針のもとに、生れる時どこかへおき忘れてきた根源のないのちの泉を湧きたたせるように努めながら、その一瞬一瞬を僕自身の手で撮影して行こう。これには君、さぞかし大勇猛心が要することだろう。ところで現像焼付は例によつて君まかせだ。焼増引伸はご随意だが、アルバムはいけない。仕上つたものは散逸するに委せるがいい。

「どう？ 部屋は氣に入つたかね」

着古した大島紬に庭下駄をつつかけた散歩帰りの伯父の姿が、逆光をうけて東の濡縁の先にあらわ

月 日

れた。すがすがしい暁だ。

「なにもかも上等すぎて、これではかえつて旅情が湧きませんよ、伯父さん」と僕は神妙に答えた。伯父はふふんと目もとで笑いながら、旅情がお入用なら、と戒めるようにいつた。

「近所を一廻り散歩するだけで十分だ。どこにでもうんざりするほど転つてゐるよ。建築や工芸美術に關するかぎり、この島ほど豪華な遺産を持つてゐるところはないだろうからね。首里城、識名園、靈殿、浦添城社、ヨードレ、崇元寺、崇元寺橋、真玉橋、壺屋……お好みまかせ、よりどり次第さ。この通り、首里那覇附近だけでも十指にあまるほどある。それに地方の名勝古蹟を加えれば、半年や一年ではとてもおいそれと沖繩の舞台は見物しきれやしない。箱庭のように狭くるしくて、その癖きりもなく広い自然、丘に囲まれた田園と盛沢山な伝説、独自の王朝をもつ歴史、文学、演劇、音楽……心配ご無用！ 未知の旅人を陶醉させるに事欠くようなおそれは、決してないからね」

「詩的だ……詩的ですねえ、伯父さん」と僕は聞いてゐるうちに半ば有頂天になつて言つた。「それだけ伺つても、すばらしいじやありませんか。きつと詩情に溢れた島なんですよ」

「詩情？」

問い返した伯父は、あふなく噴きだしそうな顔をして、ことさらにぶかしげに眉を寄せた。

「なるほど、詩というものがあつたね。詩は旅人の領分だ。詩が旅情の重要な部分なのか、それともまた、旅が詩情の重要な部分なのか、私は知らないがね。おそらく島の人びとも、詩なんか知りはいないだろうよ。そんなものは、どうでもいいのだ。ただ、どこにでもある変哲のない生活があるだけさ。貧しい者は求め、富む者は更に求める、弱い者は奪い、強い者はいつそう奪おうとする……同じことだ」

伯父は二、三度独りでうなずいてから、まあ事情の許す限りゆつくりするさ、とにこやかに結んだ。

「言つておくが、よく見ようと思つたら、ゆつくりすることだ。沖繩の旅情には暇と余裕がつきものなんだからね」

鍵の手に建てられた家の明るい離室風の八畳が僕のために用意されていた。まだ入れかえたばかりの真新しい畳は朝風に高く香り、日ざしを受けた障子の裾をほんのり萌黄色に染めあげている。籬をめぐらした庭にはクロトンの植込みが、紫、赤、緑を主調とする葉鶏頭の配色に似たいろいろあざやかな七彩の葉を波うたせ、玄關寄りの芝生に生えている一本の椰子からは、絶えずさらさらとさわやかな葉ずれの音が聞えてくる。東の濡縁はせまい中庭をへだてて隣家の石垣に向い、その石垣に沿つて延び放題にひろがる竜眼の小枝の蔭から、ひろいなめらかな若葉に抱かれて、まだやつと実を結んだばかりの、赤ん坊の握り拳のようにかたく締つた芭蕉の実（バナナ）が、一房二房覗いている。

家の背後には、一段ばかりの甘薯畑を距て、黄金森と呼ばれる丘が青々とした芝草をまどつてなかなか起伏を見せ、赤松の疎林と蘇鉄の群は、その丘の傾斜に高さや幅と陰影を宿して空につづく。それは自然や人間のもつ明瞭な定義を超えた不可知な実在へのあこがれを喚び起さずにはおかない。僕は正直に告白する。真昼の灼けるような太陽を浴びて丘に立つた僕は、未開の土人さながら、アミミズムに憑かれたままなす術なく最初の驚きに打ちぬかれていたことを。万象に隈なく遍在し、不斷に交流し、見事な変遷を招き、時には手厳しく支配し決定するという造化の神秘が——ああ、君、これは突拍子もない発見だ。はしなくも白日のもとに曝された無休の営みが、僕を微塵に蹂躪する。白日のもとにある！ 何と力強い、健康な意識だろう。何て素朴な勇氣づけ、何てまたみずみずしい生の自覚だろう。短い南島の冬は去ろうとしている。僕はいま若々しい植物の息吹に充ちた豊満な自然の懷に抱かれているのだ。白日のもとにある！ 何というはれはれしさ。誇らしさ。善悪もない。虚実もない。美醜もない。そこにはただ知覚を超え、官能の及ばない頑強な生の享樂があるばかりだ。

午後、従妹の案内で那覇を一巡してきた。君、僕の見たものは混乱している……整頓できない……疲れたのだ。

廢港になつた泊港とまりの入江に身を傾けて浮んでゐる塗りのはげた廢朽の爬竜船……鴻原かたはら一帶に連る阿旦あだんの林や珊瑚礁の浜辺……海につきでた断崖に君臨している竜宮城さながらの波上宮、日に輝くその赤雲朱塗の杜殿……辻原つじはらの墓地道に匂う哀愁……辻町を行く遊女のひなびた媚態……石門いしもん通りの埃っぽい腹賑ぶり……絶えまないカジマル並木や波止場にただよう郷愁……県庁附近の裏通りのもつ静かな感傷と、石垣にはさまれ、幾重にも曲りくねつた暗い露地にみなぎるやりきれない憂鬱……意地っぱりで糊の強そうな青年の群や鋭い眼つきをした田舎のお内儀さんたちの高調子な会話に含まれる、それとない希望や詠歎、愚痴や諦観……崩れかけた石橋、一面の砂糖黍と甘薯畑、丘に溢れる輝かしい日光……光と影と湿気と異臭と……。

君、蕪雜な羅列を哄つてはいけない。澄んだ空、真白な雲、海と丘と家と人と……ああ、なんて豊饒な自然の装いだらう。日光と懸引のない感情と飾気のない服装……ああ、この烈しい胸の高鳴りはどうだらう。僕は酔つた。僕は混乱した。眩惑させられ、恍惚とした。一度にあまり沢山見すぎたのだ。眼も頭も心も、体ごとそっくり、打ちのめされてしまつてくらくらする。強烈な南の太陽が僕の胸を射とめたのだ。南の大氣が僕をさらつたのだ。僕はもう文字通り惱殺なうころされそうだ。

僕らは崇元寺橋の崩れかけた石の勾欄に倚つて、暮れてゆく安里川やすりがわの川面を眺めていた。張りさけそうな激情がこみあげてきて、何かしら饒舌じょうぜつらずにはいられなかつた。初めて見た島の印象がざらざらした幻影となつて頭のなかをかけまわる。好奇心が、驚異の念が僕から休息を奪つたのだ。

「こんな誇らしい土地を故郷と呼ぶことができるなんて、君はまあ、なんて果報者なんだらう」
僕は今日の深い感銘を率直に従妹に告げて、感動的に、ほとんど陶醉的にまくしたてた。